

# 歴史は繰り返す？ 第二次グローバル化の未来

2013年12月2日

京都・国際シンポジウム

柴山桂太

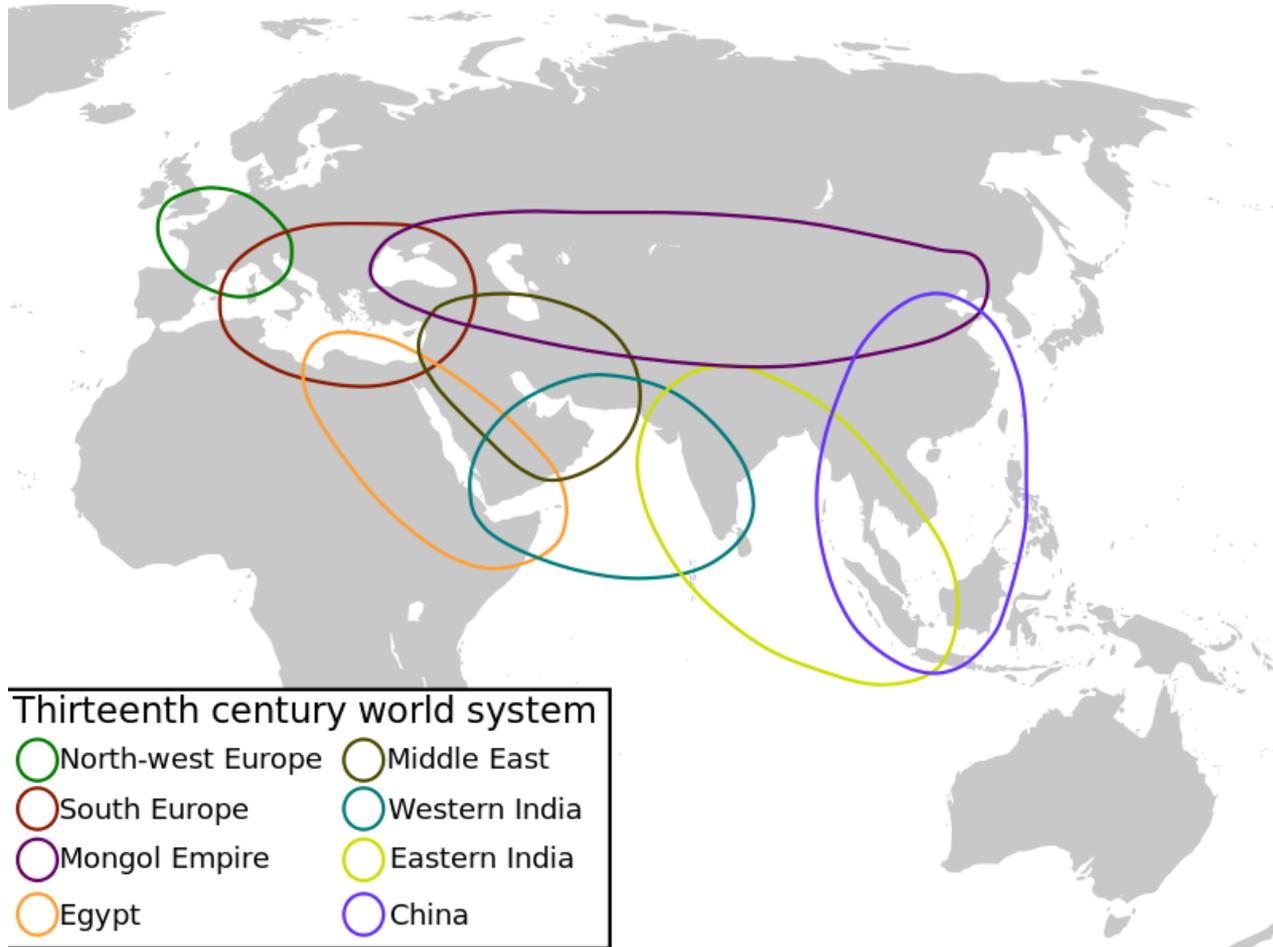
# 問題提起

- グローバリゼーション(貿易、投資、人の移動、技術の移転...)は、最近になって始まった現象ではない。一九世紀～二〇世紀初頭を「第一次グローバル化」の時代とすると、現代は「第二次グローバル化」の時代。
- 第一次グローバル化の時代は、二度の戦争と大恐慌によって終わりを迎えた。では第二次グローバル化の未来は？

# グローバル化の前史

- 近代以前の注目すべきグローバル化は二つ  
「パクス・モンゴリカ *Pax Mongolica*」(13世紀)  
「大航海時代 *Age of Discovery*」(15～16世紀)
- 前者はモンゴルによるユーラシア大陸制覇の時代であり、帝国内の関税撤廃によって陸路・海路の交易ネットワークが発展した。(J・L・アブーニルゴド『ヨーロッパ覇権以前』岩波書店)
- マルコ・ポーロがアジアの旅行記(『東方見聞録』)を記したのもこの時代。
- 同時にペストの広まりなども起きたとされる。

# 13世紀のグローバル経済



# 大航海時代

- 航海技術の発展(輸送革命)がもたらした世界貿易の拡張＝世界史におけるヨーロッパ優位時代の始まり
- ヨーロッパと新大陸、東南アジアの航路が開き、貿易(金銀・茶・磁器・香辛料・奴隷)、投資(東インド会社などの多国籍企業)、人の移動(商人、宣教師)が活発化。新大陸のジャガイモ・トマトの伝来は世界の食文化を一新することに。
- 日本は戦国時代であり、鉄砲・キリスト教の伝来が有名。(同時に梅毒などの伝染病も伝来)

# 16世紀のポルトガル・スペインの貿易ネットワーク



# 第一次グローバル化の時代

- 狭い定義に基づくグローバル化(貿易・投資・人の移動・技術移転)が統計的に確認できるのは一九世紀後半～二〇世紀初頭。
- 近年の歴史研究では「第一次グローバル化」と呼ぶ。
- 「第一期のグローバリゼーションの時代と現代との統計的な比較を試みた経済学者は、たいていその相似性に驚く」(ハロルド・ジェームズ)
- 「1870年から1914年にかけては、北大西洋地域内における貿易と資本移動と人口移動が、いくつかの点で今日よりも高い水準にあり、結果として、各国間の賃金と物価の格差を縮めることになった。」(スザンヌ・バーガー)

# 同時代の証言

「1914年に終わりを告げたこの時代は、人間の進歩の中でなんという異例のエピソードであったことか！ ……ロンドンの住人は、ベッドで朝の紅茶をすすりながら、電話で全世界のさまざまな産物を注文することができた。同じように、彼は自分の富を、世界の天然資源や新事業の投資に好きなように振り向けることができたし、少しも心煩わせることなく、その果実や利益の分け前にあずかることができた。」(J.M.ケインズ『平和の経済的帰結』1919年)

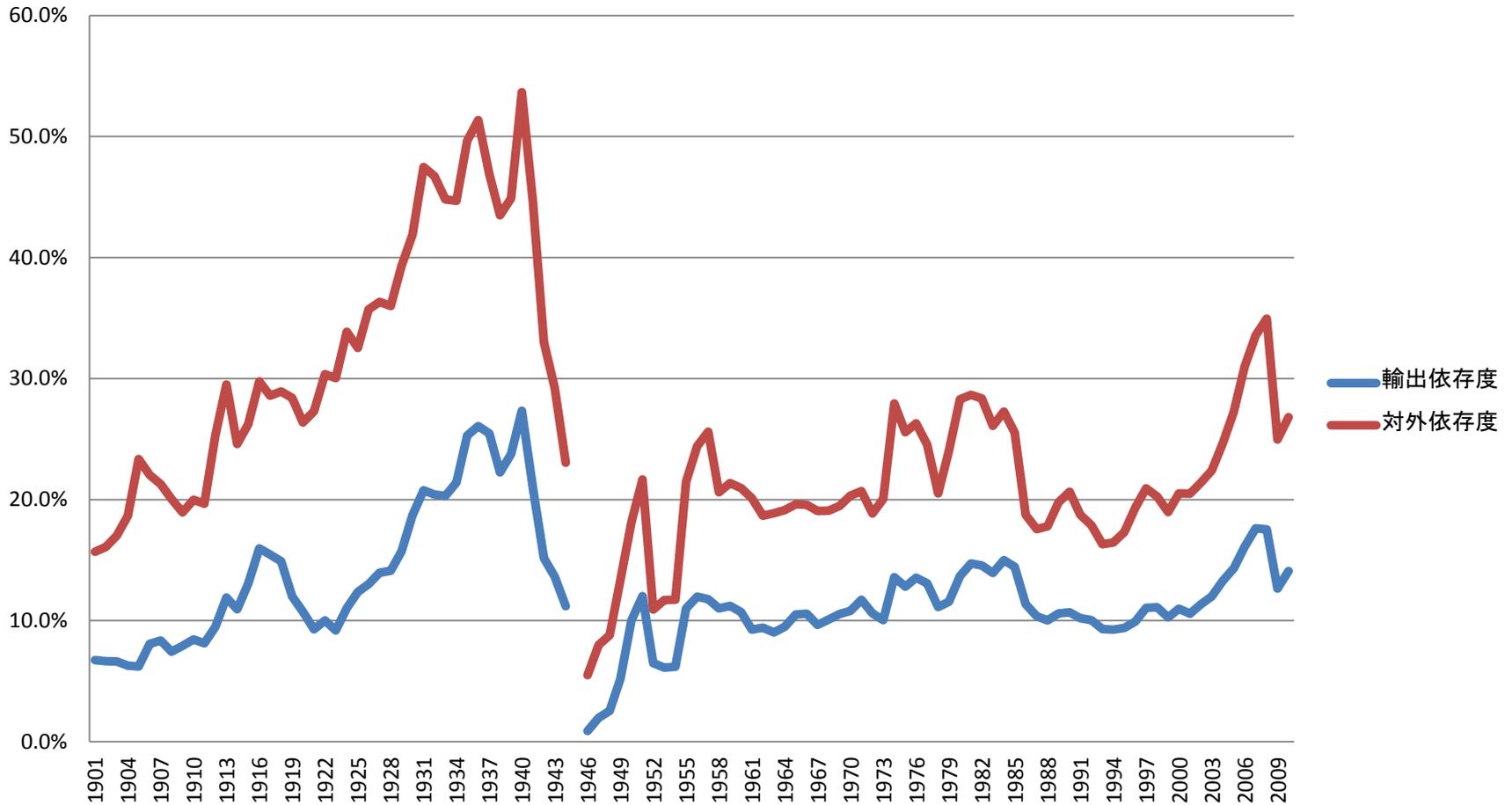
# GDPに輸出が占める割合

(%)

	イギリス	アメリカ	フランス	ドイツ	日本	ブラジル
1820	3.1	2.0	1.3	-	-	-
1870	12.2	2.5	4.9	9.5	0.2	12.2
1913	17.5	3.7	7.8	16.1	2.4	9.8
1929	13.3	3.6	8.6	12.8	3.5	6.9
1950	11.3	3.0	7.6	6.2	2.2	3.9
1973	14.0	4.9	15.2	23.8	7.7	2.5
1998	25.0	10.1	28.7	38.9	13.4	5.4
2008	29.5	13.0	26.9	48.1	17.7	13.7

出典： *Globalization in Historical Perspective*, p.41. より作成。2008年については世界銀行データ。

# 日本の貿易依存度（1901-2009）



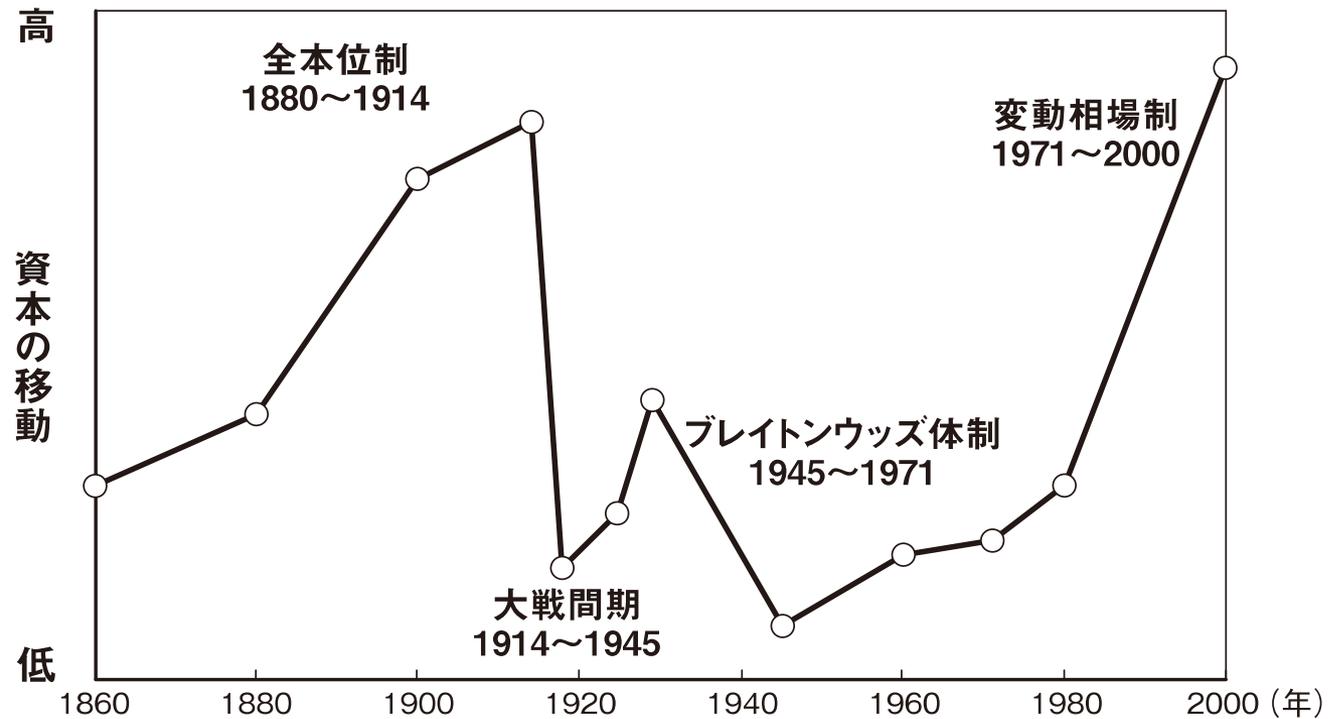
# 対GDP比で見た資本移動額の割合

(%)

	イギリス	アメリカ	フランス	ドイツ	日本	アルゼンチン
1870~1889	4.6	0.7	2.4	1.7	0.6	18.7
1890~1913	4.6	1.0	1.3	1.5	2.4	6.2
1919~1926	2.7	1.7	2.8	2.4	2.1	4.9
1927~1931	1.9	0.7	1.4	2.0	0.6	3.7
1932~1939	1.1	0.4	1.0	0.6	1.0	1.6
1947~1959	1.2	0.6	1.5	2.0	1.3	2.3
1960~1973	0.8	0.5	0.6	1.0	1.0	1.0
1974~1989	1.5	1.4	0.8	2.1	1.8	1.9
1989~1996	2.6	1.2	0.7	2.7	2.1	2.0

出典：“Two Waves of Globalization”, *NBER Working Paper 6904* P.8 より作成。経常収支の対GDP比を絶対値で示したものの。

# 資本移動の概念図



出典：Globalization in historical perspective, P127

# 移民の動向

元の人口に占める割合

	1880s	1890s	1900s
送り出し国			
イギリス	-3.05	-5.20	-2.04
イタリア	-1.65	-3.37	-4.87
スペイン	-1.51	-6.01	-5.18
スウェーデン	-2.90	-7.20	-3.51
ポルトガル	-3.52	-4.16	-5.94
受け入れ国			
アメリカ	5.69	8.94	4.02
カナダ	2.27	4.89	3.71
オーストラリア	11.28	16.59	0.77
アルゼンチン	4.50	25.6	9.50
ブラジル	1.98	3.82	8.44
ニュージーランド	53.52	4.08	4.15

※ 日本も移民輸出国だった(ハワイ、アメリカ、ペルー、ブラジル)→1950年代まで続く

# グローバル化はなぜ起きたのか？

- 大国間戦争の不在(大国間の勢力均衡)
- イギリスの海洋覇権と「自由貿易」
- 国際通貨制度(金本位制)の確立
- 「輸送革命」(鉄道、蒸気船、冷凍技術、電信...)
- 他にも「帝国主義」(貿易・投資ルールの強制による取引費用の削減)、国際社会における「信念体系の共有」なども。

# 第一次と第二次の比較①

	第一次		第二次
貿易		<	
資本移動		=	
人の移動		>	

※輸送・通信技術の飛躍的な技術進歩もあった

# 第一次と第二次の比較②

## 他の共通点

- ① 多国籍企業の活動が活発化
- ② 「資本主義の平和」が広く信じられていた
- ③ 中心国（第一次はイギリス、第二次はアメリカ）では、自由主義経済学が強い影響力を持っていた

### ▶ 古典派経済学 → 新古典派経済学

「見えざる手」(価格による自己調整メカニズム)、競争による生産性向上、資源配分の効率性、自由貿易、財政規律などを重視する考え方

# 第一次と第二次の比較②

- ④ 先進国と新興国の地政学的対立
- ⑤ 繰り返される「金融危機」
- ⑥ 大国の「帝国主義」？

## 異なる点

- ① 国際通貨制度の違い(金本位制の制約)
- ② 政府の能力(景気調整能力)、セーフティーネットの違い(※ただし先進国のみ)
- ③ IMF、WTOなど国際機関の存在

# 第一次グローバル化の挫折

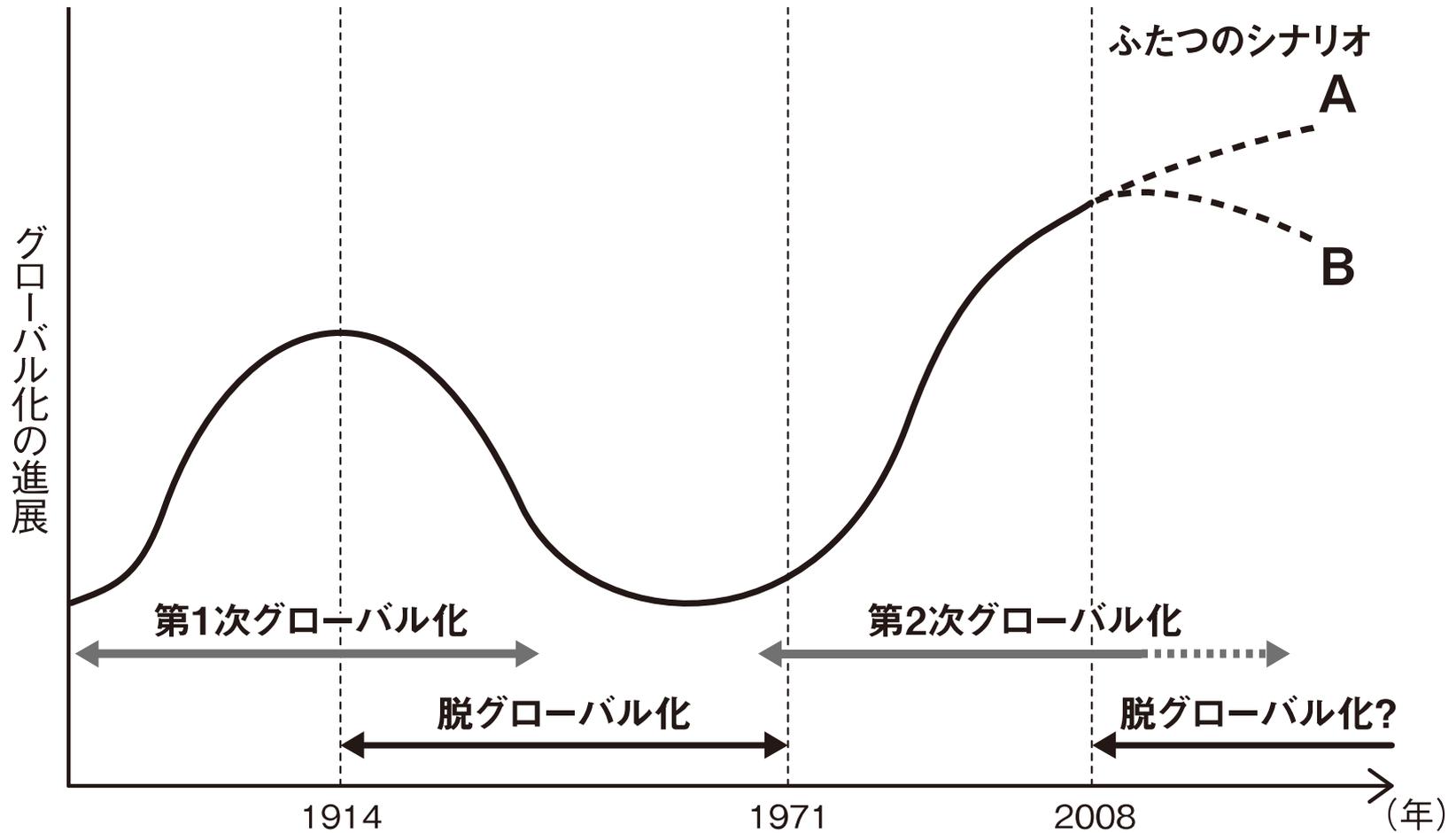
「第一次大戦は全てを変えた。1914年の夏、世界経済は人びとにはなじみのある形で順調に進んでいた。商品や資本、労働の移動は、今日のわれわれがよく知っているのと同じレベルに達した。大西洋を越える海上輸送と電信網は、かつてないほどににぎわっていた。資本と移民は西に向かい、原材料と製品は東に向かった。ところが戦争は、グローバルゼーションを、文字通り沈没させてしまった。ほぼ1300万トンに近い輸送物資が、ドイツ海軍、なかでもUボートの攻撃によって海底に消えた。国際的な商取引、投資、そして移民は、すべて途絶えた。」

(ファーガソン『憎悪の世紀(上)』, 172-3頁)

# 混乱の戦間期から戦争、戦後へ

- 1920年代からグローバル化が復活（各国が自由貿易、金本位制に復帰していく）
- 1920年代はアメリカで空前の資産バブル（「狂騒の20年代」）が発生、世界の経済成長を牽引
- 1929年に始まり、1931年から世界恐慌が本格化
- 英米を皮切りに高関税・ブロック化（自由貿易の終わり）、各国が統制経済に移行（K・ポラニーの言う「大転換」）、そして戦争へ
- 戦後は各国の経済管理（貿易・為替・資本移動）が強い時代が1970年代前半まで続いた（「脱グローバル化」時代の到来）

# グローバル化の二つの波



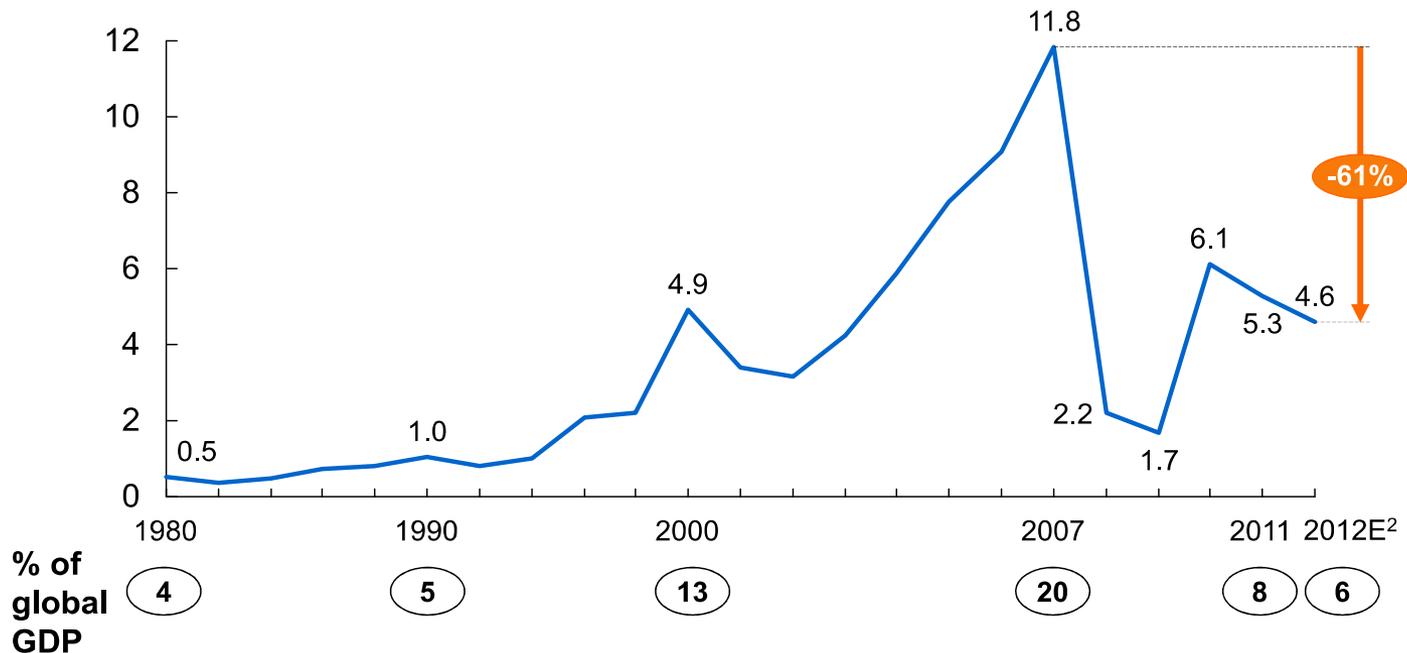
# 国際資本移動はピークから半減以下

## Exhibit E2

**Cross-border capital flows fell sharply in 2008 and today remain more than 60 percent below their pre-crisis peak**

Global cross-border capital flows<sup>1</sup>

\$ trillion, constant 2011 exchange rates



1 Includes foreign direct investment, purchases of foreign bonds and equities, and cross-border loans and deposits.

2 Estimated based on data through the latest available quarter (Q3 for major developed economies, Q2 for other advanced and emerging economies). For countries without quarterly data, we use trends from the Institute of International Finance.

SOURCE: International Monetary Fund (IMF) Balance of Payments; Institute of International Finance (IIF); McKinsey Global Institute analysis

# 歴史は繰り返す？

- グローバル化は、急速なパワーシフト(力の移動)を生み出す。戦前においては、ドイツや日本の台頭が地域秩序を大きく揺り動かした。
- グローバル化は、社会の所得分配に歪みを作り出し、それを是正しようとする政府の活動に「足枷」をはめてしまう。そのため、社会不安の高まりを抑えることができなくなる。
- 国際社会／国内社会の安定を取り戻すことはできるか？

# 軍事予算の増減率(2010年)

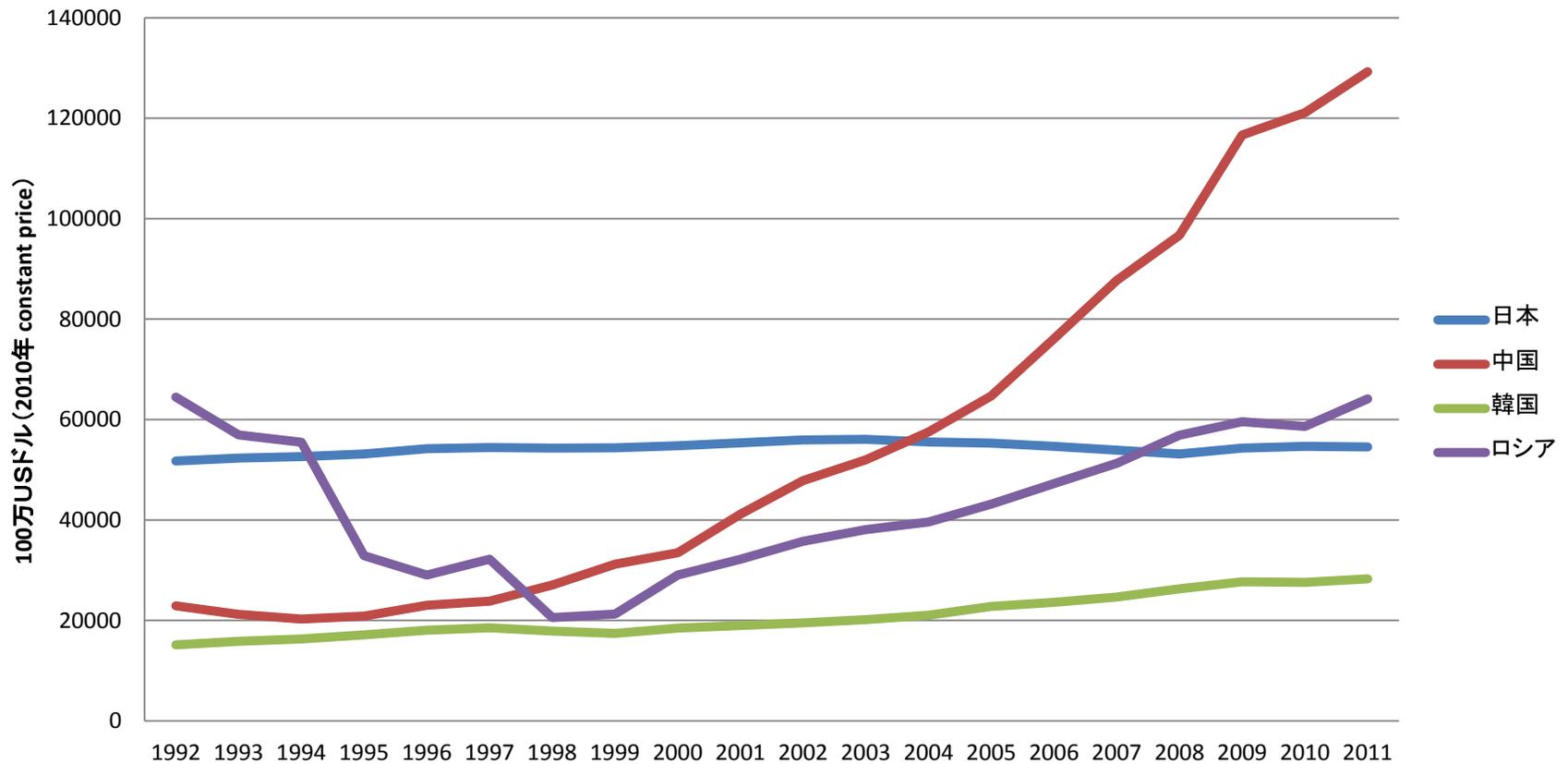
	1990年	2010年	増減率
アメリカ	510,998	698,281	37%
ロシア	259,734	58,644	-77%
フランス	65,774	59,098	-10%
ドイツ	66,876	45,075	-33%
日本	49,421	54,641	11%
中国	17,943	121,064	575%
韓国	13,881	27,572	99%
インド	17,575	46,086	162%
イスラエル	11,219	14,242	27%
サウジアラビア	23,445	45,245	93%
イラン	2,415	11,096	359%
シリア	1,107	2,346	112%

Stockholm International Peace Research Institute のデータをもとに作成

※イランのデータは2007年のもの

# 東アジア軍事バランスの変化

## 日本、および周辺国の軍事費の推移(1992-2011)



東アジアは中東と並び、地政学的リスクが高まっている地域

# 「社会の自己防衛」

- K・ポランニーが、第一次グローバル化崩壊の原因として挙げたのが「社会の自己防衛」
- 労働も土地も、値段をもった商品として取引されるようになり、人々の生活は市場メカニズムの働きに振り回されるようになる。
- しかし人間はそうした不安定な動きに耐えることができないため、必ず自己防衛を始める。それが協同組合の設置や、労働運動、(農業を中心に)保護関税を求める政治運動、また中央銀行の創設といった一九世紀後半の社会変革につながっていった。
- 行きすぎたグローバル化(市場経済化)が、その反動を呼ぶ(「二重の運動」仮説)

# イギリス以外は関税を強化していた

## 各国の平均関税率

	1875	1913	1931	1950	1995	1999
フランス	12-15	20	30	18		
ドイツ	4-6	17	21	26		
イタリア	8-10	18	46	25		
イギリス	0	0	n.a.	23		
EU					5.7	3.6
アメリカ	40-50	44	48	14	4.6	3

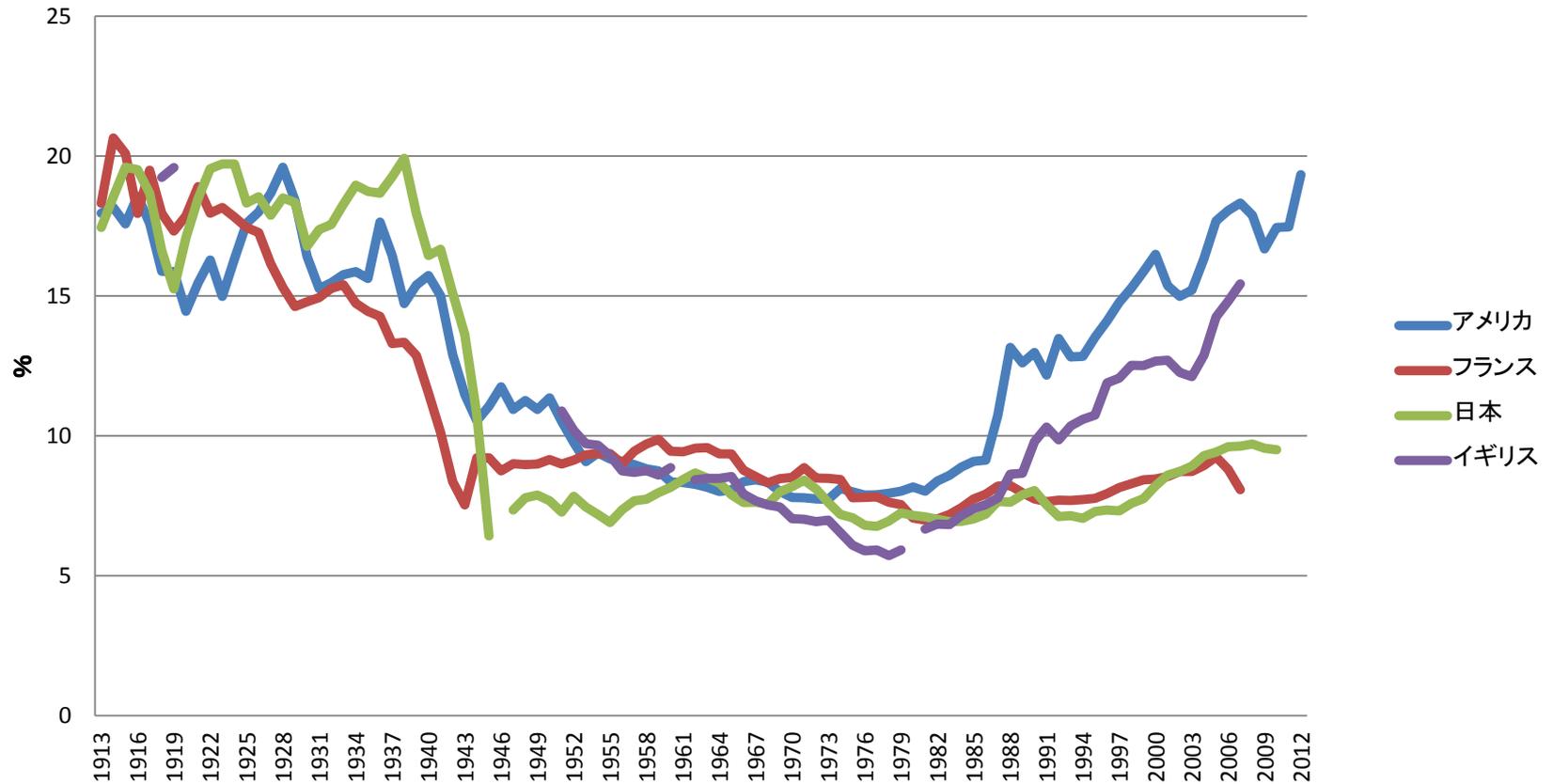
※ 特にアメリカの高関税に注目→保護貿易による「アメリカン・システム」

# グローバル化という「足枷」

- 第一次グローバル化の時代には、金本位制が各国の自律的な金融・財政政策の「足枷」となっていた。
- 現代では、金本位制はない。だが、行きすぎた自由貿易の枠組（WTOからFTAへ）や、財政規律への要求（福祉拡大の制限）などが、新たな「足枷」となっている。
- 社会不安の高まりは、今後、さまざまな問題を作り出すだろう。

# 格差社会の「再来」

## 上位1%による所得占有率



# 所得格差とバブルの関係

- 現在の世界経済の不安定は、2000年代のアメリカ、欧州（ドイツ以外）、中国の住宅・不動産バブルが弾けたことによる。
- 所得格差による底辺層の不満を抑えるには、**資産バブルを起こす（あるいは放置する）のがもっとも手っ取り早い手段**。（福祉による再分配は政治的にきわめて時間がかかる。）
- 近年のアメリカ、中国で起きた**不動産バブルの背景には、所得格差の拡大**があった？

# グローバル化と新自由主義の関係： 「黄金の拘束服」

「経済成長を推進する第一エンジンを民間セクターに置き、...官僚体制の規模を縮小し、可能な限り健全財政に近い状態に維持し、関税を撤廃するか低く下げ、外国からの投資に対する規制を取り除き、輸出を増やし、国有企業と公益事業を民営化し、国内産業・株式市場・債券市場の門戸を開放して外国人による株の所有と投資を奨励し、国内の競争をできるかぎり促進させるために規制を緩和し、年金のオプションをずらりと並べて...国民に選択させる。こうした各ピースをひとつに縫い合わせて、「黄金の拘束服」ができあがる。」(T・フリードマン『レクサスとオリーブの木』上、142頁)

「グローバル化には「黄金の拘束服」しかない。たとえ、まだ身につけていない国があっても、じきに手を伸ばすことになるだろう。」(同上)

# 拘束服とは？



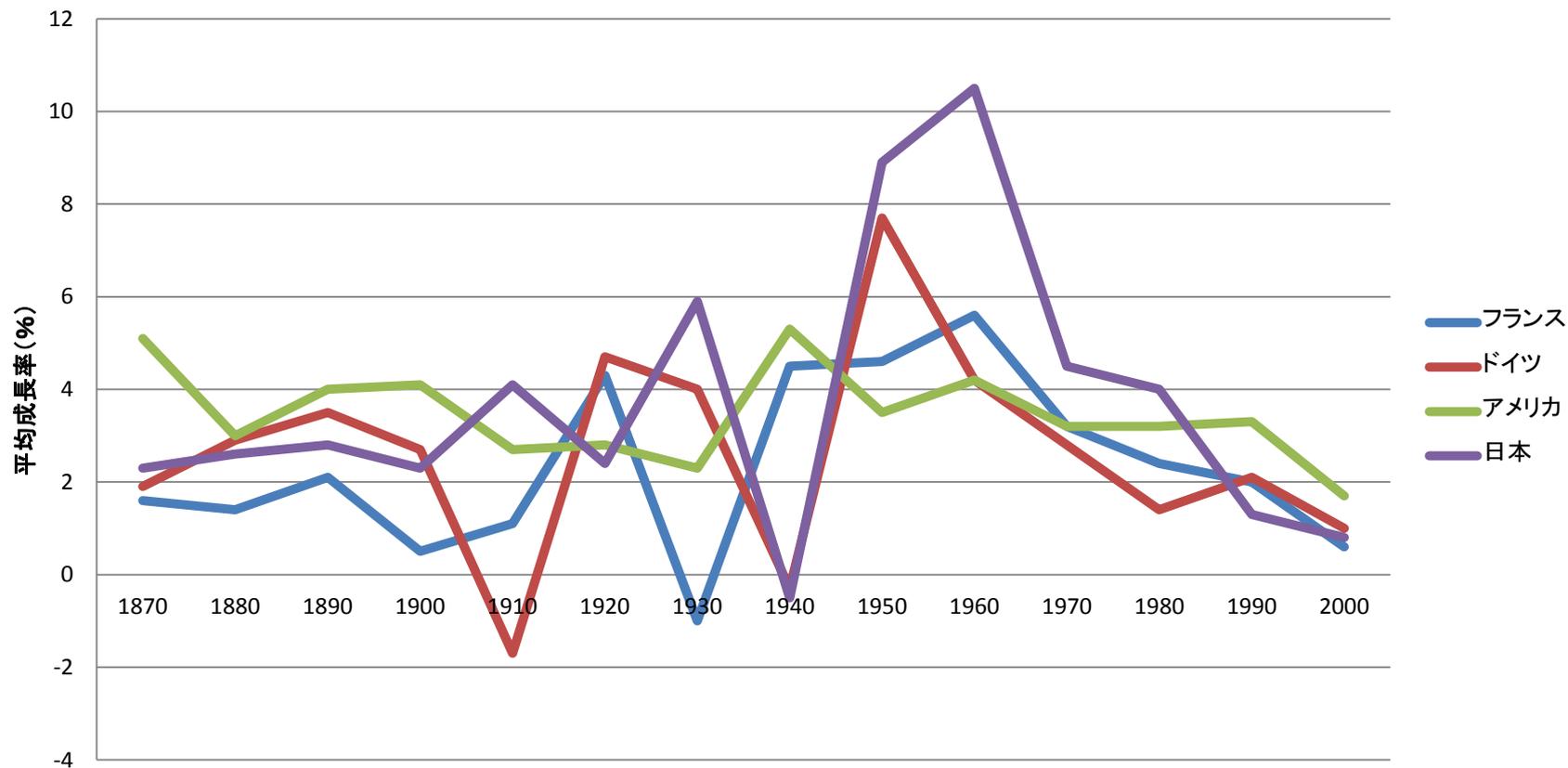
自由貿易の逆説:企業や投資家の「自由」は高まるが、政府は「不自由」(黄金の拘束服を着る)になる

# 国家主権と民主主義を認める

- 第一次グローバル化の「失敗」は、金本位制によって各国の経済・社会政策の自由度を制限したことにあった。
- 各国の国家主権と民主主義を認める国際体制へと移行しない限り、第一次グローバル化と同じ「失敗」の道を辿る可能性が高い。
- 今後、各国は、世界経済の混乱や(所得格差の拡大などによる)社会不安の高まりへの対応を迫られる。もし、自由貿易や資本移動の自由が、国家主権と民主主義を脅かすのなら、それを制限する必要も出てくるだろう。

# 脱グローバル化の時代は決して不幸な時代ではない

平均成長率の推移(1870年代-2000年代)



# 歴史の教訓

- 第一次グローバル化は、悲劇的な終わりを迎えた。だが、戦後のブレトンウッズ体制(「第一次脱グローバル化」体制)が、戦後の繁栄をもたらしたのは否定できない事実。
- ブロック経済化や戦争のような極端なイベントを体験することなく、「脱グローバル化」へと舵を切ることは可能か？ いま問われているのは、そのような問題である。